
光と闇のハザマ～Faulty Person～

白波の使徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇のハザマ～Faulty Person～

【NNコード】

N8739E

【作者名】

白波の使徒

【あらすじ】

少年は、感情が壊れていきました。友達の四肢がばらばらに切断されていたのを見た時だつて、何も感じず、死体を見たという気持ち悪さだけ感じました。そんな彼を慕う、一人の幼馴染な少女。彼女は感情表現が露骨で、彼女は自分の感情を素直に彼に言います。しかし彼は、何も思えません。良心の呵責。そして彼は壊れていきます。そんな中、町では連續通り魔が勃発し、犯人とうかりコンタクトしてしまい、殺人宣告されます。彼の胸には、何かが渦巻いているようです、それは

「ねえ、ミッキー。人を殺すことって、いけないことだと思つ?」

路傍、美渚凪が僕に言つた。

「絶対にいけないことだと思つよ」

僕は即座に否定した。

「即答だね。でも、うん。一般人に聞けばそういう答えが返つてくれるのが当たり前だけど、それがミッキーの口からも聞けるとは思わなかつたな」

「確かに、僕は普通じゃないよ。君ほどじゃないけどね」「ふふ、何を言つているの?あなたも私も同類なのに」

「同類つて言うな」

「あら、まさにその言葉がぴったり来ると思つんだけだ」「まあ、ね」

僕は素直にそういう。凪は笑う。

「あなたのそういうところは、魅力の内に入ると思つわ。素直つて、いいことだもの」

僕がそうだとは思わないけどね。

「ええ、そうかもね」

こやつ。

ふふ、と彼女は笑つた。

「でも、あなたのそういうとこ、嫌いじゃないわ。殺すのが惜しいくらい」

ああ、あれは空耳じやなかつたんだ。

「そうよ。れつきとした宣言、約束。……いいえ、契約、かしらね。とにかく、十三人目に、あなたを殺す。これは私の中では、もう規定事項なんですから」

そうか、と僕は人事のように口元をゆがめた。その顔は、他人から見ると、多分、笑顔に見えるんだろう。

僕は、ミッチーだと、ミーちゃんだと、ミーだとかいろいろな名があるけど、そんなことはどうでもいい。彼女は、その名を美渚凪といつ。名前こそ美しいものの、顔も綺麗だけどね、すばり、連續通り魔事件と銘打たれた連續殺人事件の犯人、すなわち殺人鬼である。

何も、僕がそれを知らずにこうして歩いているわけではなく、それを痛いほどに了解している。

交わされた約束は、昔の罪と同じように消えないものであつて。全ては、あの夜に。

七月十二日、金曜日。キリスト教徒どころかカトリックとプロテスタントの違いもわからない僕にとって、その日は十五日の日曜日と同じくらい無意味な日だ。つまりは平日と同じ扱い。それに、その日が十二日の金曜日だと知ったのも、あれから少ししてからだ。

その日の真夜中、一時ごろ。

あまりの熱帯夜に、僕は散歩を決意した。

夜、あまりに満月が綺麗な中、僕は外に出た。

なんてことはない、ただの気まぐれだ。

生ぬるい風を受けつつ、しばらく、気持ちに任せてぶらぶらしていた。と。

背筋が、
凍つた。

脊髄に液体窒素をぶち込まれたような、日常の中に消えていった悪寒。まずい。

この類の寒気は、

必ずといつていいほど、悪い思い出とともに記憶に刻まれていた。

僕が、はたと足を止めた。

その誰かも、足を止めた。

僕が歩く。

気配も歩く。

僕が止まる。

気配も止まる。

僕はわざと大きくため息をついた。

これはあれか。流行の通り魔つてやつか。まさか自分が被害者になるとは思つてもいなかつた。圧倒的多数の人間に群れることによつて失う危機感。それを僕は久しぶりに味わつていた。

僕は一つ深呼吸をし、手を大きく上げ、静止の合図を出した。殺氣立つた気配が、ぴたりと止まる。

そして、手だけをクイクイ、と曲げた。着いて来い、の意思表示である。

彼、ないし彼女は了解していたようで、ナイフを鞘に戻す音が聞こえた。

ここでは、周囲に人目がある。

どこか、人がいないところがいい。

僕はそこに、川原の河川敷を選んだ。殺人としては絶好の場所。なるべく人通りの少ない道を選び、そして目的地、橋の下までやつてきた。

ここで、初めて僕は後ろを振り返つた。

そこに、何かが立つっていたのは見えたけれど、姿かたちまではわからなかつた。

「あなた、慌てないのね」

凛とした声が聞こえた。女だ。体も小柄。こんな人が犯人だなんて、僕には、少しばかり意外だ。

「今まで幾度となくこういうことはやつてきたけれど、こんな反応をしたのは、あなたが初めて。……つまんない」

「それは、たぶん他の人は正常者だつたんだろうね」「そうに違ひないわ。あなたはどこかおかしいもの」「かもね」

「……一つ、聞かせて」

「なに」

「もしかして、あなたは現状を理解していなかしら?」「してるとも。これで悟らないやつはただの馬鹿だ。」

「そう、じゃあ、なんであなたは、ここを選んだの?」

「それはつまり、なんでわざわざこんな人気のないところを選んだか、と言つことか。そんなの、簡単だ。」

「ここなら、迷惑かからないからね」

「それは、どういう意味?」

「そのままの意味さ。僕の死体が路傍に転がつてゐるなんて、気分悪いじゃないか」

それは、多分本音だつた。

「……そう。じゃあ、もう一つ」

「一つじゃなかつたつけ」

「もう一つ聞かせて。なんで、今、あなたはそつやつて平然として

いられるの」

「なんでだろ?うね。」

それさえもが本音であつた。そんなときださへ、僕は無感情であつた。

「……あなた、名前は?」

「ミッチーって呼んでくれ

「……あなた、本当に変わつてゐるわね」

「君に言われたくないよ。……君は?」

「私は、美渚凪」

彼女は、見惚れてしまいそうな雅さで、大きなナイフを取り出した。「ミッチー、か。多分、あなたのことば一生忘れないでしょ?うね」

「どうか。」

「じゃあ、ほんの一時だつたけど、楽しかつた。じゃあ
サヨナラ。そんな声が届いたか、届かないかの間に、美渚凪は、僕
との距離を零にした。

「！」

早い。僕は思い切つて横へ跳んだ。数瞬遅れて、彼女のナイフが、
僕の首筋があつたところを一閃する。

「へえ」

彼女は、僕を見た。

「早いのね」

「……君にほめられたくはないね」

「そう」

彼女はもう一度、ナイフを構えて突進を敢行した。
もう一度横跳び。しかし、何度も引っかかるような彼女ではなかっ
た。彼女は横薙ぎした。

「お」

すんでのところでかわす。

そして、彼女の乱舞が始まった。

僕に、ナイフでの乱れ突きを繰り返す。

それを、僕はかわし続ける。でも、僕は武道の達人でもなんでもな
い、素人だ。前の二回は、断言しよう。偶然だ。

僕はやがてバランスを崩し、地面に仰向けに転ぶ。
好機、とばかりに彼女はナイフを突き出し、刹那。

『……。』

時が、止まった。

お互い、ぴくりとも動かない。いや、違う。お互いによつて、お互
いが動けない状態にされていた。

彼女のナイフは、僕の頸動脈の、薄い皮膚を破る一步手前で止まつ
ている。

僕の指が、彼女の目の前で止まっている。彼女の目は、見開かれていた。

今の彼女なら、皮膚を貫き頸動脈の流れを絶つことなどたやすいことだ。だが、その時間は、僕が指を彼女の目の中に入れ、一度と光を見られないようにするには十分すぎる時だ。

僕の命と、彼女の目玉、二個。重みは歴然としているが、僕にってはどうちらにせよどうでもいいものだ。ただ、せめてもの死への抵抗活動として田潰しくらいにはしてやろうじゃないか。

「ふふ」

彼女は笑って、ナイフを投げ捨てた。僕も、指を引っ込める。

「引き分け、ね」

彼女は笑うように言った。

僕は荒い息を整えるのに必死だったが、彼女は平然としている。

「あーあ、仕留めそこなっちゃったな」

本当に、つまらなそうにそう言つのみであった。

「うん。私、君のこと気に入ったわ、ミッチー」

冗談ともつかぬ事を言い、彼女はくるりと背を向け、暗闇に消えて行つた。

「お……おい」

僕は虚空にそう言つた。

ただ月だけが生きているような、塗り固められた闇の中。僕はそこに一人で立つていた。

いつか、あなたのことを殺してみせる
そんな声が聞こえた。

これが、僕と、美渚凪との出会いであった。

殺人鬼は続ける。

「でも、ね。人を殺すことって、案外簡単なのよ」

「そんな知識が実証されることがないといいけど」

「そうね。あなたの場合は。私は、もうだめ。血の匂いに、憑かれてしまったもの」

そう囁き、彼女は雅な動きで指を動かした。殺人鬼ってのはみんなそういうものなのかな。

「それって私のこと？」

「そうかもね」

「失礼ね。私は殺人鬼じゃありません」

「人を八人も殺しといて、今更何を言う」

「殺人鬼って言うのは、ほら、すなわち殺人快楽者、殺人嗜好家のことでしきう？」

凪は違うのか。

「違いますとも。私は、殺すことに何も感じません」

「じゃあなんで殺す。自分と同じ人間を。

なんでする。人間として最も禁忌の極みに入るものを。

「あら、今、禁忌の極みって言つた？それは殺人じやなくてよ？」

「そうなんだ。

「じゃあ何？」

「自殺。それが、人間として……いえ、生き物として一番してはいけないことなの」

断定か。

「そうよ。……あのね、自殺の定義つて知つてる？」

自分で自分の命を絶つことだろ？

「まあね。あと、人間は生まれながらにして罪を背負つてゐるって話、聞いたことある？」

キリスト教か。

「そんなんあつた？まあいいわ、とにかく、人間つてのは存在 자체

が罪なの」

つまりは人類みんな死ねと?

「それじゃ意味ないの。そしたら、背負っていた罪はどうなるの? その罪を背負つた自らの結末を見ないで、いなくなっちゃうんじゃあその罪は永遠に消えないものでしそう? ほら、ここで自殺のもつ一つの意味が見えてくる」

「意味、とは?」

「一言で言うと、『逃避』でしょう。自らの罪からの、贖罪からの逃避。返すべきものを返さないで、死んでしまうだなんて、それこそ最高の罪だわ」

じゃあ殺人とは?

「そんなのまだまだ可愛いものよ。人の命を絶つんでしょう? そりやあ、その人の罪の返上を不可能なものにするわけだし、未来への扉を閉ざすことになるのだから、悪いことよ。でもね。殺人って、することで背負う罪があるわけよ」

「殺人罪じゃなくて?」

「ちがうの。そんなものじゃなくて。あのね。要するに、殺人ってのはその人の罪も一緒に背負うことになるの」

僕は反論を試みる。

「でもさ、そんなのは罰にはなってないじゃないか。そんな罪は、ただの空虚な妄想だと考える人のほうがむしろ多いはずだ。そういう人にとって、そんなものはぜんぜん大した事ではないはずだよ」

「罰と罪は違うわよ。その罪で背負う罰は、やっぱ、罪悪感。これが究極的な罰かしらね」

「それだって、何も感じない人もいる」

「そんな人はいないわよ。多かれ少なかれ、誰もが罪悪感というものは持つもの。それは、今後の自分の行動を妨げたり、立ちはだかつたりするわけ。贖罪の労力が増える、ただそれだけの話よ」

「じゃあさ、贖罪ってのは究極的にどういうこと?」

「そんなの簡単よ。死ぬこと」

矛盾だ。

「ちがうの。これは、天寿を全うする、つてこと。苦しんで、苦しんで生き抜いた末に、自らの人生を省みて、自分の全ての結末を受け入れる。これが、完全な贖罪よ。」

「つまり、自殺つてのは罪を途中で投げ出してしまうことか」

「そういうこと」

「じゃあさ、例えればいじめにあつたとしよう。それがどうしようもなく辛いものであつて、逃げる術もない、苦しんで苦しみぬいた末に自殺を選択した人がいた場合はどうなるんだ?」

彼女は言つ。

「どうだろつ。例えば、誰かがインフルエンザの一億倍くらいの感染力と、最強の致死性を誇る病気にかかつたとしよう。その人が生きているだけで、周りの人々は死ぬ。もしそんな状況に陥つたら、普通の人は、まず間違なく死を選ぶ。周りから見れば、それは英雄的なものと評価されるだろつ。でも、それはやはり精神が弱いからなんだ。死ぬほうが、生きるより千倍楽だものね。でも、やはりどんな状況に陥つても、生きて生きて、それで自らの結末を受け入れるべきなの」

なるほどな。

「なんとなく、分かつた気がしたよ」

「そう、よかつた」

彼女は、そして微笑む。この笑みが、凄惨なものになるところは、あまり想像したくない。

ふと視線を前にやると、そこはもう僕の目的地、高級住宅街の一角を占めるマンションであった。

「じゃあ、僕はここからで」

「そう、じゃあ、バイ」

そう言つて、彼女は背を向けて歩き出す。歩き出したはずなのに、そこにはもう何もなかつた。

「ふう」

僕はため息をつき、本来の目的を果たすこととした。そう、もともとあんな殺人鬼 凪と話す予定はなかつたのだ。ばつたり、偶然出会つてしまつたばかりに、ああしてくつわを並べていただけだ。そんな言い訳をしつつ加賀峰凜のマンションの、カメラ機能付チャイムを押す。

ピンポーン、と流れのような電子音が聞こえ、程なくして返答が帰つてくる。

「はーい、あ、みーちゃん？ 待つて、今開けるー」

僕に一言も発する暇も与えずぶちり、とチャイムの切れる音がし、カシャン、とオートドアが開いた。ここいら高級住宅ではこれが当たり前だそうだけど、玄関の時点ですでに我々庶民との違いを見せつけられてしまい、どうしても、僕はこの地に足を踏み入れるのを躊躇してしまう。

さて、僕がなぜこんなところにいるのか。理由は簡単。クラスメイト、数少ない友人の一人である加賀峰凜が、ここ一ヶ月間学校に姿を現さないのだ。よつて、この手にぶら下げたハーゲンダッツ（ストロベリー）からも推測できるであろう、いわゆるお見舞いってやつに参上仕つたわけだ。……溶けてないといいけど。

僕がエレベーターの超高速上移動に頭をくらくらせつつ、最上階を告げるアナウンスに促され、僕はエレベーターを出、すぐ真向かいの、加賀峰凜の家のドアへと歩み寄つた。

ここでもチャイム。3秒ほどの間の後、ドアが勢いよく開く。おかげで、チャイムを押した後、自然とドアから遠ざかる習性がついてしまつた。

「やーみーちゃんーおはよー」

相変わらず、こんなに暑いといつのに黒いコートを着て、マックスマイル、マックステンションで加賀峰凜が姿を現した。太陽が傾きかけているこの時間におはよー、といつのはこいつとつるんでいればそう抵抗を感じることではなくなる。

「ん、さては寝てたね」

彼女の挨拶は、彼女が起きてからどのくらい時がたつたのかに反映される。おきて三時間経つ前は「おはよー」で、それ以上は「こんちわー」、さらに六時間が経つと「こんばんわー」である。こいつは変なところで几帳面なのだ。寝癖も治さない、几帳面。「うん、貴重かも。

「ううん、大丈夫、もう起き掛けたから」

「そうだ、はいこれ、冷蔵庫」

そう言つてビニール袋を手渡す。

「わー、なにこれー。うおー、ストロベリーー！」なんて声を尻目に、僕は部屋へお邪魔した。お邪魔しますを言わないのは両者間の暗黙の了解だ。

僕が凛の私室に入り、彼女が遅れて入つてくると、ふとその日の片隅に怪しいオーラがむんむんする板状の物が入つてきた。

「なにそれ」

「ウイジヤ盤」

即答。つて。……はい？

「シーカー朝のころかな」とまで駄目押しをくれた。

「……シーカー朝つて初めて聞いたけど

「えー、みーちゃんちゃんと授業受けてるー？」言つてたじやん、センゼー。

「記憶にないな」

これは後日談だが、こんなのは全国トップの大学の世界史で名前だけ出てくるような、そんなマニアックな王朝であった。貧弱大学に通う僕らには無縁な話であり、やはり先生はそんなこと言つてはいなかつた。

「うにー、まあいいや」

そういうてにへらつと笑う。言つまでもないが、この天然少女は名前を加賀峰凛という。黙つていれば普通に可愛い奴なのだ。が、あまりのハイテンションに、美人ポイントは激減の目を見ている。ま

あ、それはそれでまた違う趣があるけど。ちなみに、僕と同じ大学に通う学生である。とてもそう見えないのは何もその体の小柄さだけではあるまい。いつも楽しそうにしているが、彼女は決して幸せというわけではなかつた。それ以外の感情を知らないのかも知れないと思い始めたのは最近のことだ。

それは別に家が貧しいというわけではない。むしろ彼女はものすごいお金持ちだ。

ただ、両親、親族、その他がいないだけだ。

彼女の両親は情報機器かなんかすごい発明をしたらしく、現在進行形で、ものすごい量のお金が入つてくるため、彼女は一生働かなくて済むだろう。三十回の人生を遊んで暮らしてなお釣りが来る様な、僕ら庶民には思いもしない大金であることは確かだ。

しかし両親は交通事故で、意図的なものな、死んだという。そのあたり、僕とは似ているため、こうしてつるんでいるのかもしない。……いや、そんなのは逃げ口上だ。ただ、僕は、何も隠さず開けっぴろげに感情表現できる彼女がつらやましいだけなのかも知れなかつた。

話を戻そう。僕の両親は、通り魔によつて惨殺された。九歳のときだつたか。そして僕はおじの家に引き取られたが、そのおじも僕僕が十五歳くらいのときに事業に失敗し、多額の借金を背負つて自殺してしまつた。当然、返済の義務は僕に帰結し、払いきれないような額のお金を要求された。それを肩代わりしてくれたのが、他ならぬ加賀峰凜である。当時のクラスメイトで、僕の数少ない友人の一人であつた彼女であつたが、暗い顔をしているところを巧妙に嗅ぎ取られ、僕から全てを聞き出すと『よつしゃ、じゃあ私が肩代わりしたげる!』なんて言い放つた彼女もある。……いや、そんなことはどうでもいいのだ。

僕は小さいころから、人よりずつと多い人の死に立ち会つてきた。合計すれば、間違いなく五は下るまい。僕の記憶力の悪さには定評があるので、正確な数はわからないけど。

……何か、感じなかつたかつて？

・・・・・

何も、感じなかつた。

なぜか、なんてわからない。ただ、両親が通り魔に惨殺されたと聞いたときも、おじの自殺を聞いたときも、友達の家に遊びに言つたらその友達が両手足をばらばらに切断されたのを目にしたときも、涙ひとつ、嗚咽ひとつ漏らさなかつた。漏らせなかつた。

ただ、死体を見たという気持ち悪さだけ。

何よりも気持ち悪いのは自分自身だというのに。

現実だと認識できなかつたわけではなく、むしろ葬式場に集まつていた誰よりも、現実をしつかりと捕らえていたと思う。

ただ、本当に、本当に何も感じえなかつたのだ。

今も現に、ほら。僕はこんなことを思い出しつつも、なんとも思つていらない。

ぼくは、無痛症の精神バージョン、いわば無感症なのかもしれないと思い始めたのはそう最近のことではない。

「欠陥人間」。造語、b y 僕。

何をしようが、何をされようが、どんな精神的、感情も巻き起こらない。自發的な感情さえもが稀少で、滅多にそういうものは現れず。愛というもののなんて、この世の中に存在する超能力者と同数、すなわち、ゼロに近い。

だから、僕は人に好意を抱く以上に抱かれるほうが苦手である。その好意が重ければ重いほど、僕は困惑する。

その好意に、応えられる感情がないから。

そして、良心の呵責。しかし僕の心は無反応。

そして、今僕は、この純粹で天然な少女に対し、何を思つているのだろうか？

何を抱いているのだろうか？

理解できる日は、いつか来るだろう。

その感情が、どんなものであるとしても

「うん？ どうした？ みー」

「……なんでもないよ」

そか、と彼女はウイジヤ盤をいじるのを止め、相変わらずの笑顔で僕に話題を振った。もう飽きたらしい。

呪われた日本刀から、月の石まで収集してしまう彼女のことだ、これもお蔵行きか、骨董店行きか。愛撫するだけしたら、次のものへ移り、それは買値よりも高い値段で売るのが加賀峰凛流だという。

「……だつてさ。知ってる？……というか聞いてる？ みーちゃん」

「……あ、ゴメン、完膚なきまでに完全に超絶的に聞いてなかつた」「え？ 全くみーちゃんは。いいかい？ もつかい？ 言つよ？」

凛は少し息を吸い込んでから言った。

「だからね、……通り魔、だつてさ」

「通り魔？」

「うん」

彼女は、ゴロリと寝転がった。

「もう八名様が仏様になつてゐるそうだよ？ こりやあもう大事件さ！」
こいつはかわいらしい外見の癖に案外こういう話題を振つてくることが多い。それはつまり今の世の中にはそういう事件が多発している、ということだ。こいつはまた、ヒキコモリなくせして世界情勢には人三倍くらい詳しい。

「八人つてすごい数なの？」

「当たり前だよ！」とスーパーハイテンションの突つ込みが飛んできた。

「確かに、三人までが殺人で、そつからはもー殺戮だよ」

初耳だ。

「だろうね！ 私の持論だもん」

即興の、と彼女は付け足した。

「それに、八人も殺したつてのにまだ何も手がかりないんだつてね？」

「へえ。それで、一週間も閉じこもつて調査してたつてわけか？」

「へへ、そうだよ。」

彼女はペロンと舌を出した。あくまで趣味の延長なはずなのに、よくやることだ。

「みーちゃんも手伝つてよ。一人よりは一人のほうがいいはずさ」
そのファンシーな表情が一瞬にしてシリアススパイズを含む。この表情は忙しく変わる。

「でも、こりなるともう国も動かざるをえないだろつね。五人だよ？それに、まだまだ増えそうだし。私の予想だと十三人は殺されるんじゃないかな？なんて思つていいんだだけね」

「国まで動くの？こんな地方的な県に？」

「地方的な県だからだよ」

加賀峰凜は、ウイジヤ盤を脇に押しやつて、大きな瞳で僕を睨み通すように言った。

「こんな事件は、絶対に地方的な県で起こっちゃあいけない事件なんだ」

「……。」

「でも、何だろ？ 今までの殺人鬼と比べると、なんか殺人衝動ゆえの殺人ではないような気がするんだよ」

「どういう風に？」

「頸動脈切断。みんなそれが致命傷で殺されている。比較的苦しまない、スマートな殺し方だね。それに、みんなまぶたが閉じられてるの。こだわりがあるつていうか」

「でもまあ、だいぶ獵奇的だな」

「うん」

彼女は肯定した。

「だから、みーちゃんも気をつけてね。大好きみーちゃんが冷たくなつてますよ、なんて聞いたら私、泣くからね。テレビカメラの前でいい人でした、なんて言いたくないよ」

彼女はいつになく真摯に言った。

「…わかつたよ」

僕はそう応えるしかなかつた。

「…わかつたよ」

それからは、極めて普遍的な会話に花を咲かせた。今ここに一億円が落ちてたらどうするとか（凜は交番へ届ける、と言つた）、今まさに、地球に超巨大隕石衝突する十五分前だつたらどうするとか、とにかく、そんな他愛もない話だ。

「よし、じゃあ僕はもうそろそろお暇することにしてようかな」

僕がそういったのは、太陽はもう沈み、外は暗くなつてからだつた。

「あつー、もう？ もつとゆっくりしていきなよ」

「もうそろそろ帰らないと、ほら、通り魔」

「みーちゃん言い訳ー。通り魔は昼夜問わず営業中だつて言つたじやん」

そうだつたつけ。

「そーそー、だから今日はここに泊まつていきなさい」

だからつて、話が飛躍しすぎだと思う。

「うーん、何も用意してないし」

「うん、そうだね」

あつさり彼女はあきらめると、続けて心配そうに言葉を紡ぎだした。

「気をつけてね」

「ああ、大丈夫、いざとなつたら必殺サマーソルトがあるから」

「別名山突、だね」

そうそう、と僕は乾いた笑いをこぼした。

「じゃあ、家に着いたら、すぐにかがりんの家に電話すること。三秒以内ね」

「そんな、ガキじゃあるまいし」

「だーめ、私から見たらガキなの。心配で夜も眠れなくなつちゃう「凛にガキ扱いされるとは心外だ。後、まだ寝るのか。

「良い子は育つんだよ」

寝る子だろ。

「うにー、そんなのジーでもいいでしょ。そー帰つた帰つた」

「どっちなんだ。

「そりゃあ帰らないでほしけども。でも帰らないといけないなら、

早く帰らないと

こいつの言葉は矛盾だらけだ。

「了解」

僕はそう言い、凛の私室を後にした。

「ああ、電気消さないでね」

「わかつてゐよ」

こいつは、暗いところがだめなのだ。前に一度、こいつの家にいるときに停電になつたことがあつた。そのときはもう、大変だつた。何言つてゐるかわからないし、子猫をとられた親猫みたいに暴れまわるし。しかも、電気がついたころには半泣きだから何もいえないし。そんなことを考えつつ、後ろで手を振つてゐる気配を察知したので僕も後ろながら手を振る。

廊下を抜け（僕はこの空間を廊下と呼ぶ）とこなをか抵抗を感じる。この時点で、僕の部屋より広いからだ）、ドアに手をかけると、後にしたばかりの部屋から声が飛んできた。

「あ、そうだ。みーりやん、これ」

凛は僕にいくつあだ名をつけければ気が済むのだろう、と心中で思つてゐると、いきなり視界に前方後円墳形の金属が入つてきた。

「うわ」

かろうじてナイスキャッチ。

「これは？」

「うちの鍵ー」

「どうしろと？」

「閉めるのめんどいから閉めといてー」

その後この鍵はどうするんだ。

「あげるー」

なんて声が響いてくる。

「……ええ？」

「こーのこーのー。スペアだしー」

「いいの？」

その声に続いて、にゅいつと手が伸びてきた。

「でも、代わりにみーちゃんの部屋の鍵もちよーだいねーええと、それはつまり？」

「もー、鈍いなー」

彼女はひょっこりと顔だけを出した。

「カレシとカノジョの間の鍵交換なんてジョーシキだよ、ジョーシキー」

そう、恥じらいもなくあっけからんと言い放つ彼女であった。輝かしいばかりの、純粋で、明るい、無垢な笑顔とともに。

「…………」

「…………カノジョ、ね」

僕は自分のアパートの通路を、彼女の台詞を範囲しながら歩いていた。

彼女は、その言葉をどんなニュアンスで使つたんだろうか。……いや、もちろん今のは冗談だ。それさえもわからないほど、僕の頭はもうろくしていない。……たぶんね。

やはり、彼女は一般的でありながらも意味としては一次的な、ええい、つまりは「コイビト」「アビト」の意味で使つたのだろう。

「コイビト」「アビト」？

いつから、僕と凜はそんな関係になつたのだろうか。出会つた時から？そんなはずもあるまい。

僕が初めて凜の家に上がつたときか？いや、あれはそんなニュアンスを持つ行為ではない。

いつの間に。

僕と彼女の間はこんなになつていたのだろうか。

僕はポケットから鍵を取り出そうとして、舌打ちした。スペアは渡してしまつたんだ。

仕方なく僕は財布の奥底から真鍵を引っ張り出し、鍵穴に突っ込み、そしてくるりとひねる。カシャン。

僕は電気もつけず、暗闇の中田の前に広がる畠に倒れこんだ。

「……ああ

限界か？ 凪は言っていた。僕も凪の同類だと。

加賀峰凜が僕に注ぐ愛は、僕には少しばかり重過ぎる。

僕には、何も、応えられるような感情はないと言つた。

でも、彼女にとつてそんなことはどうでもいいのだ。

ただ、僕という人間に好意を抱き続けるだけで、彼女は幸せなのだ。

そう、だから僕の精神は自らの存在を拒む。

このままでは、僕は、壊れてしまふかもしない。

壊れないためにはどうすればいい？

そんなの、簡単だ。

元凶を、壊してしまえばいいのだ。

つまり。

僕が壊れる前に、加賀峰凜を壊してしまえばいい。

そうすることで、自分が壊れるのを防ぎうるのなら、僕はそつするだろう。

しかし、僕は未だに彼女を壊せないでいた。

自分を愛してくれる少女を壊せる人間など、存在しようか。

でも、もう、臨界地點はとうに越している。

彼女の重すぎる愛は、確実に僕の心を蝕み。

確実にその時は満ちてゆく。

加賀峰凜を壊さねばならなくなる、その時が。

でも、彼女は、僕に壊されかけても、いや、殺されても僕のことを愛し続けるだろう。

無垢で、純粋すぎる彼女の心には、そんなことは小さすぎるのことなのだ。

僕が加賀峰凜を壊したとて、そこに何か意味が生じることはないのだ。

結局、彼女は僕に何をされようと、僕の精神を蝕み続けるのだろうか。

「……全く、なんていう戯言だ」

僕は虚空に叫つた。

そうぞ、こんな、戯言でしかない。

矛盾だらけで、何の責任も負う気のない、冗談だ。

「ああ、そうだ、電話」

僕は携帯電話を引っ張り出し、凛の家にコールした。ワンコールもしないうちに、凛の声が響いてきた。

「あーよかつた！みーちゃんじやないか！無事に着いて何よりだよー。おねーさん安心ー」

誰があねーさんだ。

「うふ、そんなのどーでもいーの。とにかく、無事に着いてよかつたよ。この三十分くらいがかがりんには五十三年分に思えました」

んなおおげとな。

「ほんとだつてー。気が気じやなかつたんだよー」

そうか、心配させちゃつてゴメン。と社交辞令を述べる僕。

「ゴメンじやないでしょ。」

……ありがとう。

「どういたしまして。そんな素直なみーちゃんが、私は大好きなんだよ」

「僕も、そんな単純な凛が好きだよ」

それは、質量のない、誰にでも言えるような、空っぽの言葉だった。そんな僕の気持ちも知らず、あつー、という悲鳴が聞こえた。

「なんかフクザツー」

あはは、と笑い声が同時にもれた。その一つは、絶対に共鳴するこのない、対極の性質を持つものだと言つた。

「まーいーや、ありがと、みーちゃん。私は嬉しこよ。やつと、いこ

まで来れたつて

何のこと?

「ううん、なんでもない。ひとり」とー

電話の向こうで、にへらつと笑つてゐる彼女の姿が浮かんできた。彼女のそういうときは、決して嫌いではない。嫌いではないけれど。

「えじやあ、もつねるやう私はお風呂の時間だから、お暇をせてもらおーかなー」

ああ、もう十時半か。

「やうやう、後四十三びょーう」

ここつは、やはり変なところで几帳面なのだ。

「うん、じゃあお休みー」

「お休みーちやーん。ぶいぶい

ブツツ。

ブーツ、ブーツ、ブーツ、と鳴る携帯をしまい、僕は手を伸ばし、蛍光灯の紐を引っかみ、指に巻きつけ、ゆっくりと引く。

闇よりもむしろ不気味にさえ思えるような、無機質な光が苦学生を連想させる何もない部屋を満たす。これは別にお金がないわけじやなくて、ただの趣味である。なんていつのは負け惜しみ以外のなんでもない。

さて。

さつとてすることもないし。

寝ることにしようか。

僕はそのまま横にこるこる転がり、敷きつぱなしの布団に潜り込む。何のために電気をつけたのか、僕はもつ一度手を伸ばし、電気を消した。

僕は明日の講座は三時限目からだとこつ 사실を確認しながら、ゆるみると眠りに墮ちていった。十時半になつた。

「…………」

その声が、僕のものとは思えない、しわがれたものだと気付き、そして僕は事態を悟る。

頭が痛い。のどにも激痛が走る。

立ち上がりうと試み、その試みは激痛の前に完膚なきまでに失敗することになる。

やばい。これはここ数年で一番危険な類の痛みだ。僕の感覺神経が危急を告げている。

時計をちらと見る。七時。あと一分と、一時間で目覚まし時計ががなり始めることだらう。

自分の額に手をやる。おお、熱い。三十八度は下らないな、これは。立てないし、だから薬も飲めない。くや。もう、いつそ寝てやううか。

僕は目を閉じ、眠れない自分に気付いた。

さりとてすることもないでの、僕は携帯を出し、大学への連絡を図つた。でももちろん僕が自分の学校の電話番号を入れるほど几帳面であるはずもなく、目論見は玉砕することになった。

仕方なしに、凛には悪いけどメールを送らせてもらひう」とした。

『僕は今日、大学を休みます。先生によろしくお伝えください。』
堅すぎる。

『みーちゃんは今日ガッコ にはいけません、伝えといでー』
軽い。自虐的だ。

五分ほどの思考の末ひねり出した文章は、

『僕は今日大学休むから、先生に伝えといて』

とこう無難な文章だつた。忘れずに、寝てたら「ゴメンね、と件名に

打つ。

送信、と。

送信してから、ものの三十秒で返事が返ってきた。

『なんでー?』

僕はしかたなく、本当にことをメールに打つ。

『軽い風邪さ、一にちやす』

そこまで打つて、着信。フロム・加賀峰凛。あいつはメールが嫌いだといつていった。第一の理由としてはじれったいのだそうだ。アホ。

『みーちゃん! 風邪つてだいじょーぶ?』

つい五分ほど前まで寝ていたにしてはすごいぶんとテンションが高い声が響いてきた。

「だめだか……ゴホ、ゴホ」

『あわあ、喋んなくていいよ』

なんか無茶苦茶言つている。

『あつー、喋らせぢやつてゴメン、すぐそち行くから』

は?

「おこちよ……」

電話はすでに切れていた。

ゴホ、と僕は咳を漏らした。凛は、間違いなくこちらへ来る。今更何といつても、聞く耳があるはずがない、あの一つは飾りだ。

舌打ちをし、布団にもぐる。

暇だ。

徒然なるまゝに、宇宙の神祕に思いをはせていると、ブランクホールつて何だっけ?という疑問にたゞり着いたあたりで、ガチャ、という音が響いた。続いて、バーン、と。

「みーちゃん！大丈夫？」

ブラックホールは霧散し、僕は布団から顔だけを出して、その声の主の顔を見据えた。

とりあえず手は振つておく。

「ああ、喋らないで」

どつちだ。というかどつやつて入つてきた。……ああ、昨日鍵を渡したんだ。

「まずこれ、おみやー」

そういうつて袋を投げる。

僕が中を検分している間、彼女は僕の部屋に上がりつて、こちらへやつてきた。さすがに、病人にダイブするほど彼女はアホではなかつた。

ただ、おみやげとしてハーゲンダッツストロベリーを選んでくるあたり、やはりこいつはアホだ。

「あのね」

「あー、喋つた！よかつたー」

こいつは。

「それは買つてきたやつなんだよ」

変わらない気が…

気持ちの問題だよ、と彼女は一蹴した。

「そうだ、みーちゃん、熱計つた？」

「まだ」

「なんで計んないのやー」

「動けん」

「そんなに悪いのー？仕方ないな。温度計、どー？」

あ、あつたー、という声が聞こえ、数秒で彼女が戻つてきて、口に突つ込む。一昔前のコントか。

「凜」

「はにゃ」

僕は口から温度計を出し、ティッシュで拭いてから然るべきといひ

へ挟む。

「最近は、口じゃなくて脇に挟むんだよ」

「やうなの？」

そうなの、と僕は言ひ。「うん。声がだいぶ楽に出るよくなつてき
た。まだすごく痛いけど。

僕はハーゲンダッツのカップを開けた。なんだかんだ言つて、僕は
これが大好きなのだ。

僕が食べ終わるのを、凛はうずうず待ち、やがて僕が食べ終わると、
どこからか風邪薬を持ってきた。

「はいこれ、飲む

「どうやって？」

「ゴクンって」

「違つ。水、持つてきてよ」

うに、と彼女は了解し、あわただしく台所に消え、やがて水を持つ
てきた。

「ほいよー

「ども

僕は薬を飲む。にが。

「ふー

凛はため息をついた。

「疲れたよ」

「うん、起こしちゃったからね」

「いやいや、もう起き掛けたから

こいつはこいつこいつ。

「でも、カンビヨーって楽しいかも。白衣の天使になるつてのもい
いかもね」

地獄の遣い魔じゃなくて?とこつ突つ込みはしまつておく」とし
よ。

とりあえず首肯だけする。

じょーだーん、と彼女は微笑む。

「ああ、そーそー。また昨日、一人殺されたつてー
こいつは。

「また男か」

「そうそー」

彼女は嬉しそうに言つ。

「もうこれは決まりかな」

僕は誰に言つでもなくそうつぶやいた。凜が首肯する。

「よりもよつて、そりやないだらうよ、凜」

「ん？」

「いや、なんでもない」

今までの九人の被害者の共通項。それは、被害者が全員、若い男なのだ。ティーンエイジャーの末年、十七から十八までに、凜は絞つているらしかった。

「だからさ、ちょっとかがりんは心配の現在進行形なんだよねー
なにが…… そういうかけて、止めた。

「僕は大丈夫だつて」

僕はそういった。そんなのは、真つ赤なうそ、戯言だというのに。
「うに、でもさ、やつぱ不安だよー。みーちゃんが殺された、なん
ていつたら私泣くからね」

マジでこいつなら泣きかねない。感情表現が露骨な彼女のことだ、
泣くときはそれこそ滝のように泣くだらう。うん、あまり見たくな
いな。まあ、見れないけどね。

「心配性だね、凜は。僕くらいの年齢の人なんて、ここいらにも車
に積み枠で計るほどいるよ」

「よくわからないよ。それに、殺された人たちだつて、たぶんみー
と同じ気持ちだつたと思うよ」

「大丈夫」

僕は強く言つた。

そしてそれは、今までについたどのうそよりも悪性の強いうそだつ
た。

「そう？わかつた、じゃあ、もしミーちゃんが死んだら」「ムマスクしてバレエのドレス着てひげダンス踊つてもらうからね」「わけがわからない」

「うー、いいの。もういい、この話はおしまい。んでさ、この前、また面白いもの見つけたんだよ……」

そうして、会話は日常性を取り戻した。
凛の話に相槌を打ちながら僕は思う。
凪は、今何をしているだろうか、と。

十人目を殺しているか。

十一人目をつけているか。

どちらにせよ、時はたつ。

着実に、僕の最期の、その時は着実に近づいている。

人は、死を恐れるわけじゃない。

人は、無をこそ恐れるのだ。

常に無である僕にとつて、それはどうでもいいことだといったの。
僕は、普通に凛と笑いあつていた。

その笑顔に、連れて行つてもらいたかったこともあつた。

光り輝く、人間の世界に。

でも、結局は戯言。

それ故の、欠陥人間。

そちら側へ行くのは許されない行為だといふのに。

その笑顔は、僕を錯覚させる。

その愛は、僕を圧迫する。

そちらへ行けるかも知れないと言う幻想と、絶対に行けないんだと
いう確信。

二つは相克し、そこに生まれるものは皆無。
一とマイナス一の総和が零であるよう。

僕はゼロだ。

だからこそ、欠陥人間。

僕が死んだとき、彼女は何を思うのだろうか。
僕を心のよりどころとしている彼女にとって、
僕の死は、

すなわち、彼女にとって一つの世界が崩壊する。

それは比喩でもなんでもなく。

ただ、当たり前のように零と一緒に還元され、物語が幕を閉じる。

そこに残るものは。

ただの戯言なのかもしない。

彼女の、愛は、やはり、重い。

その、まぶしい、笑顔は。

僕に、夢を、見させる、その、笑顔が。

僕を、崩壊へ、引きずり、込む。

僕、には、あまりにも、重、すぎる。

突然、湧き、起こる、破壊、衝、動。

この、ままじや、僕は、コワレ、る。

彼女を、いつ、か、コワシ、て、しま、う。

僕はあなたのことを愛せないから。

破壊衝動につながるから。

もう、これ以上僕を愛さないでください。

そもそも感情といつもののが生きるうえではまったく必要でないもの、と認識する考え方もこの世には存在します。その論によるとむしろ感情といつものは邪魔者であり、人間はお互いを傷つけあってまで付き合う必要はなく、むしろ一人で生きていく生物だそうです。それは、多少の馴れ合いはあってもよさそうですが、それ以上に深くなると、傷といつものはついてしまうものなのです。

人と付き合う上で不可欠なことは、決断することです。その決断は、必ず傷を伴つものです。なぜそう決めたか、なぜこっちに決めなかつたかのかと、ひとつ決断には常にもうひとつ、つまり他の選択肢を選ばなかつた、という意味が付きまとい、必ずそれは人に傷を与えるものなのです。

その考え方を元にねらりくらりと生き続けるみーちゃん、そして現れる殺人鬼。さてどうなるか、ひとつ御期待、といった感じでしうか。

⋮

夜の街を歩いていた。

ふと、人影が目に留まる。
向こうも、こちらを見る。
無視する。

でも、かまわず彼女は近づいてくる。
無視する。

彼女は、何かを言つ。

何も反応できない。

彼女は話しかけ続ける。

けれど、どうしても何も反応することができない。
腹が立つてくる。

ナイフが、手の中にある。

これで、自らの首を搔つ切るか。
相手の生命活動を停止させるか。
後者しか、選択肢はない。

その人は、何も反応しない。気付いているのに。
その人の背にナイフを突き刺し、突き刺そうとして、この人の髪
を見た。

髪が長い。

それは、そう、加賀峰凜のように。

加賀峰凜。

加賀峰凜？

その人の顔を見る。その顔は、確かに、目を閉じた加賀峰凜のもの

であった。

ナイフには、赤い液体がこびりついている。

突き刺したつもりはなかつたのに。

加賀峰凜は、もう動かなかつた。

ふと、なにかの感情が巻き起こつていた。

それは、

怒りか。

悲しみか。

憤りか。

悲哀か。

充足感か。

不足感か。

相克する螺旋状の二つの感情が、僕を支配する。

相克螺旋の果てに見えるものは、常に皆無。

その二つは、
僕にとって。

⋮

答えは出ない。

ただ、時だけが過ぎていく、闇の中で。

立ち尽くし、頬に何かが一筋、走つてゆくのを感じた。

⋮

ふと、目が覚めた。時計を見る。七時半。せつかくの早起きだったのに、今日は土曜日という失態。でもまあ、風邪はすっかりよくなつたようだ。

ち、と舌打ちをして携帯を手にする。時計表示を見る。七月二十一日、土曜日。

僕は体を起こす。一人下宿の大学生にとって、土日はすなわち睡眠

の日だ。しかし僕は土日に限って早起き属性を持っているため、一般大学生の責務に従事することができない。すなわちは、退屈。でも、退屈は嫌いじゃない。喧騒としたところに群れているよりもむしろこちらのほうが好きだ。

ばふっと布団に体当たりをかます。ああ、疲れてない。

退屈な僕の頭に、ふと、嵐の言葉が浮かんだ。

『十三人目には、あなたを殺す』

「もう九人目だつてのにな」

「どうして、こう、僕は平然としていられるのだらう。

「もつと生に對して執着しなさい」

自分にそう言つては見るものの、誰も返事なんて返してくれない。

僕は僕にさえ無関心なのだから。

「そうだ、本」

僕は大学から借りてきた、広辞苑並みに分厚い本を鞄から取り出した。羅貫中、三国志演義。図書室にぶらりと出かけたら国語の先生に一方的に押し付けられたこの本、暇つぶしになることにほ間違いあるいは。

僕は本をペラリとめくつた。

ジョンレノンの、イマジンで目が覚めた。

目が覚めた? すなわち、僕は寝ていたのだ。僕の頭には件の本が載つていてる。

さて、なんで僕はイマジンを聞いた? イマジン。それは僕の携帯の着信音である。すなわち、誰かしらから電話が来て。ああそうか、電話だ。僕は慌てて携帯を開き、電話に出る。フロム 加賀峰凜。

「もしも」

「みーちゃん? 私」。風邪は大丈夫だよねー。あのさー、三時から、暇だよねー。じゃあ三時に迎えにいくから、用意しといてねー、じやあバイ

バイ

プリッ。

「……し」

電話はそこで切れた。くそ。もしもしも言えなかつた。一方的に言うだけ言つて切りやがつた。さすがだ。さて、情報を整理しよう。風邪? 治つたとも。三時から暇がだつて? それは全力で肯定だ。しかし、迎えにいくだと? ここに? どこに行く気だ?

ここで時計を見よう。二時十分。つまり一時間後には、僕はここにはいなわけだ。

準備、とか彼女は言つていた。何をしろと。

とにかく僕はパジャマを脱ぎ、服に着替えることにした。どこかに出かけるつもりらしいからね。

僕が首をかしげながら着替えていた間に、時というのは無常にも確実に過ぎ去つていき、時計は二時半を告げていた。

「ふう」

僕はさつきまで枕にしていた分厚い本を手に取つた。十ページまでしか読んでいない。我ながら根性がない。

よし、と気合を入れなおし、三国志演義、十一ページを開いた。目の前にインクが一定の法則に沿つてちりばめられたものの羅列が広がる。

それは少なくとも、三十分くらいなら十分に時間をつぶしつめるものであった。

僕が、劉備が徐州太守になつたあたりまで読んだところで、パタパタという足音、そして、ガチャリ、と鍵のまわる音がした。

「ちやおー、みーちゃんお待たせー。あれ、何読んでんのー? わあ、三国志ー? みーちゃんが三国志だー。わーい。諸葛亮つてかっこい

いよね

臥龍はまだ出てきてない。

一。早く二。一。

「公」

「アートメントストア」

わふふと あふふにはかりの笑顔で、彼女はそぞろに、
時計は、もうううど二時を回ったといふだつた。

彼女の話では、何か買いたいものがあるらしく、「一人じゃ寂しいから、みーも一緒に来なさい」と仰せ。

しかし、本当に欲しいものがあるのか疑わしくなるくらい、シヨーケースがある度に立ち止まつては「わー」だとか「うにー」だとか言つている。金は掃いて捨てるほどあるくせに、なかなか無駄遣いはしないようだ。骨董品集めで、それは十分なのだろうから、僕は何も言わなかつたけど。

とにかく、それほどこの人でもやってそうな、平凡な買い物であつた。つまりは、デートとか言う代物なのかもしれない。まあ、相手が相手だし、それは自意識過剰というものだ。

とにかく、僕は久しぶりに、普通の人間らしいときを過ごせた。
そして、ふと、こういうのもいいかもな、と思つた。
思つてしまつた。

「みーちゃんは外にいないとダメー」
僕は、とある店の外で凜を待っていた。

とのこと。

「うし、おーいおっちゃん！おかげー」

そんな声が聞こえたので、もうそろそろ出てくるだろう。
なんとなく人ごみに視線を投げかけると。
ふと。

綺麗な顔が目に入った。

それはずっとこちらを凝視していたらしく、人ごみの中にいてもそこ
に百年前からいたかのような存在感をあらわにしている。
彼女は何をするでもなく、黙つてこちらへ歩いてきた。

「ひさしひり。買い物？」

彼女 美渚凪は、僕に、凜とはまた違う笑顔で話しかけてきた。

「うん、まあそんなものか」

「そう」

彼女は興味なさをつぶやいた。

「順調か？」

僕はそうとだけ言つたけれど、彼女はしかと了承した。

「ええ。あなたに行くまで、あと一人かしらね」

一人増えた。

後、二人、か……。

「あのね。もうちょっと反応したらどうなのよ？つまらない」

「僕は自分にさえも無関心だからね」

「死のうが生きようが？」

「多分、ね。その時になつてみないと分からないな。そのとき抱く
感情が、後悔か、充足感か……若干知りたい気もするんだよ。自分
が、この世のことを本当はどう思つていたのかを」

「自分で自分がわからないのね」

「それが僕のアイデンティティーだ」

「よくわからないわ」

「僕も」

「……ばかみたい」

凪はあきれたようにそう言った。

「……でもね、少なくとも、あの長い髪の子は悲しむでしょう。
それでもあなたのこと好きでいてくれているんだから」

「分かってるよ、それくらい。何度も本人から言われてるしね。
そう、と凪は言った。

「あなたは、あの子のこと、好きじゃないの？」

凪はそう言った。

好きか、だつて？

確かに凪は、僕に大きすぎるほど愛を注ぐ。それは決して母性本能から来るものではないと、いつも承知している。

それなのに。

「……別に。いつもわけじや、ないよ」

なんで。

「じゃあなんで一緒にいるの？」

「……楽しいからね」

「あの子の隣にいることが、でしょ？」

そう、あくまで隣なのだ。

「そうかもね」

「……あなたは選ぶことが嫌いなようね」

「そうかもね」

「もう。よくそれで、あんな天然な女の子とやつてこけるわね」

「凪はことが細かからうが大きからうがかまわず無視する人だからね」

「ミッキーの比喩表現は分かりにくいわ」

凪に言われるとは。

「そう？ でもね、何よりも悪いのは無関心なのよ？」

それは聞いたことがある。愛情の対義語は、憎悪ではなく、無関心。古くから使い古された言葉だ。

「まあね」

「好意でも悪意でも、抱かないのかしら。もつ少し彼女に思いやり

を持つたらどう?」「

「思いやり、とは」

「……もういいわ」

凪はあきれをさらに重ねた。

「とにかく、もう少し命を大切にしなさい」

「君がそれを言うか」

僕の命を奪う予定の殺人鬼が、それを言うのか。

「まあ、そうね」

彼女はあっさり引き下がつた。

「確かに今のはばかげた話かもね。……じゃあ、そろそろお暇をさせてもらおうかな」

そう言って、凪は僕の肩越しに何かを見ていた。ふと後ろを見ると、凜が二コ一コしながら立っていた。

「じゃあ、ね。もう一度言うけど、経済学のレポート提出は来週までだから、もう忘れちゃダメよ」

どうやら凪はなかなか人に気遣いのできる人らしかった。普通の友達同士としてなら申し分のないお人だろ。う。変な誤解を招かぬように、あくまでクラスメイトであるように装つ。僕もじやあ、と言つておいた。

「ああ、凜、ゴメン、待たせて」

「いや、待たせたのは私のほうだかんねー。さて、かがりんはおなかが空きました。どこかで一服入れましょーよ」

彼女は、明るくそう言つた。凪のことなどどうでもいいらしい。

「了解、どこがいい」

彼女はすぐそばにあつたファーストフード店を指差した。そうだ。凜はジャンクフード嗜好者だつた。

僕らは連れ立つて中に入り、バリューセットを二つ頼んだ。ハンバーガーにドリンク、ポテトつき。合計千五十円ナリ。

さすがファーストとは名ばかりではなく、感心するほどの速さでセットを持ってきた。（いや、それは意味が違う）凜がハンバーガー

にむしゃぶりつこでいるのを、檻の外から愛護動物を見ていゆみつ
な感覚で見つつ、ポテトを口に運ぶ。

「ねーみーちゃん」

「ん」

「今日はありがとねー」

「いや、目的の物は買った?」

「うん、ばっちら。でさ、もしかして、今日、何の日か分からない
?」

「七夕」

「当に過ぎたよ。あう、ホントに分からないんだー」

凛は面白そうに笑う。そんなこと言われても、何も思いつかない。

「うー、じゃあ思い出させてあげよー」

そう言つて、凛は綺麗に包装された箱を突き出してきた。

「どうしろと」

「みーちゃんおたんじょーびおめでとー！ハッピーバースデイトウ
ーーー！」

「僕の誕生日は一十一日だよ」

「七月二十一日土曜日で『ゼロ』マース」

あれ、そうだつたんだ。自分でさえ忘れていた。

「とにかく、これ受け取りなさい」

「ありがと」

僕は袋を開けた。スペードのキー ホルダーだ。

「ひょっとして、さつき買ってたやつか?」

「あつたりー。ほらほら、私のハートとペアなんだよ」

そう言つて嬉しそうな凛の手には、ハートのキー ホルダーが握られ
ていた。

「ありがと」

僕は繰り返した。

「いーのいーの」

そう言い、ハンバーガーを三口で食べる凛であった。

「みーちゃん食べ終わったね？よしや、じゃあ会計してきまーす
「待った、自分のは自分で払う」

「だーめ、今日はみーちゃんのバースデイだもん」

そう言って凜は僕の制止した。そういうわれると僕はどうしようもな
く、おとなしく外へ出ることにした。程なくして凜も出でてくる。
「ほじや、今日のイベントは大成功つてことで。もう帰るーか」

時計を見ると、すでに六時半という。

「帰りは歩いつよ」

とのことで、僕らは河川敷を歩いていた。夕陽はとつに沈み、空は
蒼から赤、紫を経て、そして黒へとなつていった。

うにー、暗いよーと言いつつ凜は手を絡ませてきた。拒否するのも
ナンセンスな話なので好きにさせてやることにしたよ。

「あのさあ、現在って何だと思つ？」

唐突に凜はそういった。

「曖昧だね。でも、刹那刹那のことを指し示す単語ではないと思つ
よ」

「私もそう思う。例えばさ、今、私とみーちゃんはここを歩いてい
る、これ現在。でもさ、気がついたらここにいたわけじゃなくて、
みーたんと約束して、デパート行つて、買い物して、ハンバーガー
食べてつていう歴史があるから、今といつものがあるんだよね」

「それは未来についても言えそつだね」

「そーだね。未来がなければ、現在なんて概念は芽生えないからね。
そもそも人類進化の原点は、時間意識の発現にあると思うよ。例え
ば、ここに一人の原人があつたと仮定するよ。その子は全く蓄えのな
い「現在」の自分に気付いて、このままでは餓死してしまう「未来」
を思い、一人では成功しなかつた「過去」の狩を思い出して、仲間
と一緒に狩に行く。こうして社会が出来上がつていて、その過程

で欲望が生まれて、進化街道まつしづら、と。」

「まあ、そういうことだね。もしかしたら、現在つてのは自分の意思が介入しうる唯一無二の現実のことと言つんじゃないかな」「といいますと?」

「だからさ、過去には自分の意識なんて介入の仕様がないじゃん? 未来なんて言語道断、だから、過去を踏まえつつ、未来に向けて何らかのアクションを起こしつる、合流地点ともいうべき場。それが、現在なのかもね」

「うん。そうだね、『合流地点』かあ。新しいね」

「新しいだけだけだけどね」

あはは、と楽しそうに笑う凜。

と。

視界に、何かが入った。

何か。姿はまだ捉えられないけど、それが何なのかは感覚で分かった。

暗くなりかけてきている道の傍ら、転がっているモノ。

それが、無機質名アスファルトの地面にたたずんでいた。

「凜」

「うに」

僕は指をゆっくりと持ち上げた。

「あれ、見えるか」

凜がそちらを向き、そして楽しげな表情が一変する。凍りついた。

「……見える」

「行くか」

「しかないね」

僕らは自然、早足となる。

日はすでに没し、街灯が頼りない明かりを漏らすのみである。そこにたどり着くのに、そう時間はからなかつた。

「うわ……」

凜が柄に合わず驚愕……いや、そんな言葉では言い表せない、言つ

なれば決して起じないと信じていた悪夢が現実になつた、そんな感じだ。

「ひどいね」

僕は割合、ショックは小さいほうだった。もつとも、凜もそれほど のショックを受けているわけではないと思つ。凜の精神構造は、かなりに強い。

ただ、この現場の悲惨な光景に圧倒されているだけのようと思える。辟易、その表現が、一番正しいのかもしれない。

その死体の顔は、けれど安らかで、やっぱり苦しまなかつたんだろうなあ、と思つ。

すでに生命活動を停止したそれ。肉片という言葉が頭をよぎつた。その表現が適當だろう。生命活動を停止した時点で、それは物体であるという事実のみしか残ることのない。

しみじみと、人間とは、所詮有機物の塊でしかないということを感じさせる瞬間であった。

「うにー、さて、何を呼ぼうか。警察かね？」

「だらうね、救急車なんて呼んでも意味なんて微塵にもあるね」「よつねー」

そう言って、凜は携帯を取り出した。

「あれー、日本の警察つて117だつける？」
時間を聞いてどうする。

「110だよ」

ういつす、と言つて携帯を耳元に運ぶ。

僕は改めて現場を見直して、ふと、頭に変な思いがよぎつた。

夙。お前はこんなことをしていたのか？

何をしているんだ。もつと他にもやることあるだろ？

首筋には一筋の赤い線。これが致命傷だらうが、血はあまり出でていなかつた。

鋭い刃で切られた瓜は、その鋭さゆえに、切られた直後に切り口を合わせると元に戻つてしまつた。そこまでもないけれど、ま

あそれに近いものだと思つ。

彼女の綺麗な笑顔と、この惨たる有様は、けれどかけ離れていると言つわけではなかつた。

これで、十一目か。

あと、一人。

人間は、死ぬる時節に死ぬがよく候。

僕は死ぬときに、何の未練も、何の文句も言わずに消えてしまつただろう。

自らの死を、第三者の死としか受け取れない、欠陥人間である僕にとって。

死後とこの世界の違いを見出すことは難しいことであるから。

ただ、僕が死んだら、凛はどうするのだろうか。

ふと、そんな疑問が頭をよぎつた。

「すぐ来るつてよー」

凛は少しこわばつたものの明るい声でそう言つた。

「そつか

僕はそう言つのみだつた。

僕らは、事情聴取を少し受けてから、現場を警官方に任せ、そこを後にした。

「いやあ、あそこまで安らか死に顔な死体は初めて見たよー」

「そう何度もお目にかかりたくはないものだよね」

「まーねー。でもまあ、たぶん……といつかほほ間違いなく、あれは件の殺人犯と同じ人だよね」

凛は硬く笑う。

「まあ、まずそうだうね」

「……この分じゃあ、まだ増えるだうね……」

凛はぼそりとつぶやいた。

「みーちゃんがやられないといいんだけど」

「大丈夫さ」

「ごめん。嘘です。

「え?」

凛は心配そうに僕の顔を覗き込む。少しだけ、ほんの少し、心にしきりときた。

「じゃー私はこの辺でさよならなんだよ」

「せうか、じゃあ」

「ばははーー」

そう言って凛は無邪気に手を振る。

無防備な笑顔。

明け透けな笑顔。

僕は目をそらし、早急に家へと向かった。

44

「ふつ」

僕は書き終えた経済学のレポートを見直し 本当にあったのだ。といつか、忘れていた。同じ学校でもないのに、偶然だといいんだけど 鞄にしまった。

「……お腹空いたな」

僕は冷蔵庫へ歩み寄るが、小腹にけよつじよこものは何も入っていないなかつた。

「買いに行きますか」

今日はまだ夜の散歩をしていない。あの日以来、僕は夜の散歩を嗜好するようになった。散歩がてら、コンビニへ。合理的。まだ十一人目だし。

僕は財布を手にし、玄関を出た。

生ぬるい風邪に気持ち悪さを感じつつ、すぐそばのコンビニエンス・ストアに向かう。

暗い道を歩くと、否応無くあの日の夜を思い出す。今から思えば、あの時の僕はどうかしていったのかもしれない。

と。

「あれ

後方に何かを感じた。

さつと振り向き、影が電柱の陰に入った。

風ではなさそうだ。彼女はあんなに露骨ではない。独学のプロフェッショナル・キラー。それが彼女のアイデンティティーなのだから（意味不明だ）。だとしたら、誰か。

まあいい。とられるものなんて命しかないわけだし、その命も風に奪われる予定なのだ。

コンビニに入り、適当なお菓子と菓子パンを購入。そして雑誌コーナーへと歩いてゆく。適当な漫画雑誌を手に取りページを開く。目を一瞬漫画に落とし

そして、外を見る。

「う……。」

黒いコートを身にまとい、それはいつも通りか いつもはつけてないはずの、つばの広い帽子をかぶり、髪の長い少女がそこに立っていた。

加賀峰凜。

僕は雑誌を棚に戻し、外へと出た。うわ、暑い。クーラーと熱帯夜の温度差攻撃なんて卑怯極まりないぞ。

僕が歩き出し、少ししてから凜らしい人も僕を追う。僕は、無視することにした。

やがてアパートへとたどり着き、僕はドアを開めた。台所のほうへ行き、ドアと同じ方角にある窓を開け、外を見た。

髪の長い少女が、ここが見えそうな位置に立っていた。足元に水筒を持参するあたり、結構大物なのかもしれなかつた。

「ふう」

僕は窓を閉めた。

彼女の精神構造は単純なのだ。

彼女にしてみれば、たぶん、僕が殺人鬼に狙われるかもしれない、と思ったのだろう。彼女は僕が夜の散歩を嗜好しているのを知っている。それを阻止するため、見張りに来たと。あんな。

「…………寝よう」

僕はコンビニで購入したものを食べる」とも忘れ、布団へもぐりこんだ。

「…………ふう」

私はそんなため息をついた。

暗い街を、頼りない電灯が明るくしている。正直怖い。暗闇でないだけまだ救いかもしれないけど。

…………のどが渴いた。足元に持参した水筒を口元に運ぶ。口内に麦茶が流れ込む。うん、やっぱり麦茶だね。

用済みの水筒を足元に置き、みーちゃんの部屋の監視を続けた。勘の鋭いみーちゃんのことだ、もう私が見張つてることなんて気付いているかもしない。でも、私はこうせずにいられない。

こんなことしても、何も意味ないことは分かっている。みーちゃんが、自分の存在をそう思い込んでいるように。

「でもね、みーちゃん」

意味の無い存在なんて、存在しないんだよ。みーちゃんは自分の存在を無価値、無意味だと思っているけど、そうじゃないんだよ。

私は、みーちゃんがいてくれるだけで嬉しいから。

みーちゃんが私に何も抱いていなくたって、構わないから。だから、死のうなんて思っちゃダメ。

そのためにわざわざ外で散歩するなんて、止めてよ。

殺人鬼。

私はあなたのことを知らないし、あなたは私のことを知らないだろうけど、一つだけお願ひ。

もしあなたがみーちゃんを殺そうとしているのなら、止めてください。

もしどうしても殺したいなら、私を殺してください。

彼がいてくれるだけで、存在し続けるだけでも私は嬉しい。

彼の死は、私の世界の一つの崩壊と同義なのだから。

世界の崩壊は、すなわち精神崩壊なのだから。
お願ひだから。

私はナイフを引き抜いた。

それは「うつ」と言った数瞬の後動がなくなつた。

開いているまぶたを閉じる。

少しだけ、苦しませてしまつたかもしれない。

とにかく、これで一二人目。

「ああ」

十三人目。

ミッキーの我関せずオーラ満載の顔を思い出した。

正直、どうなんだろう。

あの人は。

自分が殺されることをどう思つてゐるのだろうか。

凛、と彼は呼んでいた。

凛が、彼の死でどれだけ傷つくか、彼はわかっていない。

でも、そんのは、たぶん関係ない。殺すときは殺す、苦しませな
いように。それが私流。

私は乱れた服のすそを直し、月明かりに照らされ、そこを後にした。
私は、いつまで暴走を続けるのだろうか。

もしかしたら、私は求めているのかもしれない。

誰に？

何を？

でも、例えそうなつたとしても、それはそれでいいのかもしない。

何が？

何で？

答えなんて後付なものははいらない。

その時、事実として受け入れればいいのだ。

…ふと、そんなことを思つてしまつた。

「……情けない」

感傷なんて、久しく忘れていたと言つたのに。

朝が来る。

僕は十時に覚醒した。

だるい体を起こして、台所へ向かう。窓から外をうかがうが、さすがにそこに凛の姿は無かつた。

と、お腹がご飯を食べるのだ、とうるさく告げた。ぐぐう、と。

「ああ、しまつた」

昨日何のためにコンビニへ行つたのだろうか。せつかく買つてきたものを、食べるのを忘れて寝てしまつた。

まあいい。予定としてはすでにそこに無いもの、つまりは得だ。

僕は少し得した気分になりつつ、菓子パンの袋を開けた。

それはあつという間に腹の中へ消え、お菓子も瞬殺。さて。暇だ。

三国志に手を出さうと思つたが、ふと気になることがあつたので本屋へ行くことにした。

「あ……」

僕は思わずそんな間抜けな声を出してしまった。

今、僕は本屋の雑誌コーナーにいる。情報雑誌を手に、そこに佇んでいるというわけだ。

さて、僕の間抜けな声の要因となつたのは、次のゴシック体の羅列である。

『連續殺人事件、十二人に』

もう十二人か。十三引く十二は、一。

次は僕。

まだ一日はあるかな、と思つていたのに。リミットは切れた。

時は満ちた。

……なのに、何も感じなかつた。

ただ、事実として受け入れただけ。

受け入れた？

受け入れたのか？

僕の心からは何も帰つてこなかつた。やはりこいつは僕にさえ無関心なのだ。

『もう少し、自分のことを大切にしたらどう？』

そんな凪の言葉が古来する。

「ふう」

全く、なんていう、戯言だ。

僕は雑誌を購入することにし、早々とそこを後にした。

どこに行こうかなんて考えてもいなかつたけれど。

でも、僕の足はどうやら凜の家へ行きたがつてているようだ。大人しく従つてやろう。

たまには、最期にはこんなのもいいかもしれないから

チャイムを押したけれど、返事は無かった。

「一時まで寝ているなんて、あいつらしくないな……」

そんなことをぼやきつつ、凛からもらった鍵でオートロックを解除する。

エレベーターを経由して凛の部屋まで行き着き、チャイムを押したけれど、やはりうんとも言わなかつた。

僕は首をかしげながら鍵を突っ込む。かちり、と小気味いい音が響き、ドアは開錠した。

「おじやま……」

と、言わないんだった。凛いわく、お邪魔じやないからそんなこと言わないの、らしい。あいつは日本人の謙譲の風習を何だと思っているのだろうか。

廊下を通り、僕は凛の寝室兼私室に入る。

と、スー、スー。そんな規則正しい吐息、すなわち寝息が鼓膜を震わせた。

僕が五人は横になれそうなベッドを見ると、真ん中あたりにちよつとした小山ができていて、頭だけがひょこつとでていた。

「……」

なるべく音を立てないようにして凛のほうへ向かう。

安らかな寝顔。こんなに寝相がよいとは思つてもいなかつた。起きるときにはベッドから落ちてさらに反転している族の一員だと思つていたのに、五分前に布団に入つたばかりのような、そんな寝相。むにー、とほつぺたを伸ばしてみたい衝動に駆られたが、僕の理性は何とかそれをこらえた。

仕方ないので普通に起こしてやることにした。

べち、べちとほつぺたをたたく。『普通』という判断基準は人それぞだ。

「うんー、起きるー。暇だー」「うに」

反応あり。

「僕だー、りーん。おーい……」「うにー。……あれ、みーちゃん? なんでここに? と書つか? 私ん家? のようだね。あれ? ホワイアーコーヒア? なんだよ? なんかよく分からない。」

「お前らしくもない、寝坊だよ」

「へ? 今何時?」

「一時」

「あうー寝過!」したー。しかたない、昨日は遅かつたもんで「そうだったね。何時くらいまであそこにいたの? なんて露骨なことは聞かない。」こいつはこいつなりにがんばっていたのだ。

「そうか」

「ただけ言つた。」

「あれ、ていうかなんでみーちゃん?」

「暇だつたから」

適当にそんなありきたりな言い訳を口にする。

「ホントにー? わはお、すゞいや! みーちゃんが特に何の理由もなしにここ cameたー!」

この瞬間が天然記念物! ピデオビデオ。撮影開始なんだよ」

凛はこの三十秒でテンションを一気に最大×三分の一にまでもつていきやがつた。これ以上のテンションを、こいつは十一時間以上も維持し続けるのだ。こいつのタフネスは、僕も学ぶ点があるかもしない。

「はいこれ、おみや」

そういうつて、僕は凛に雑誌を渡す。凛は興味深げに雑誌を引っつかんだ。

「……ついに、十一人目か」

そんなことを凛は言った。

「やつぱり、スタイルに変更はないね。頸動脈切断によるショック死。ただ少し、苦しんだ後がうががえるね」

そこまでは気がつかなかつた。死体の顔写真はこんな写真を出していいのだろうか、と疑問に思つたほどのアップ写真、確かに若干歪んでいたようだ。

「でも、まぶたは閉じられてるね。少し、犯人に心の乱れがうかがえるかな」

凛はいつから心理学者になつたのだ。それに、厭が心を乱す理由なんて思い当たらない。

「でも、やつぱターゲットは変わらず青年かー。みーちゃん、頼むから死んでくれるなー」

頑張つてみるけど。

「よし、……おはよー。わわやかな朝だね！」

そういうて、彼女はがばと起きた。黒いロート、昨日と同じ。寝るときくらい脱げつて言つてゐるのに、ここにはこれだけには聞く耳を持つたない。

「寝癖治して、顔を洗おう」

「もー、やあだよ。めんどい」

まあ、言つだけ言つただけだ。やるなんて天地がひっくり返つても思わない。

そして、これからは特筆すべきことなど何もない、ただの雑談に時を費やした。

すぐ先に、そんなことが控えていてるなんて氣にもせず。

ただ、すこし、まあ、うん。

もう少しだけ、こういう時間があつても、よかつたかもしれない。もう少しだけ、こうして凛と話してみたいのかもしれない。

けれど、そんなのは所詮戯言。

そなものはやがて零と一に還元される、無駄なこと。

失うよくなものは、作らなければいい。

互いに傷ついてまで続けるような関係は、断ち切つてしまえばいい。

形あるものにはやがて終わりが来る。
精神はやがて無に帰する。

簡単に、精神なんてものは崩壊する。

それは、必ずしも死だけによるものではない。
だから、僕は感情を捨て、彼女は自分のつけた止める感情の割合を
より大きくした。

やがてなくなるものを捨てるか、わかっていてなお使い続けるか。
そこが、彼女と僕の、決定的な違いだった。

結局彼女は針の上の安定を手にし、僕に訪れたのはただの戯言。
無関心は、加賀峰凜の愛を受け自我の崩壊を促した。
壊すか、壊れるか。

結局僕は何も決断せぬまま、誰かに決められた崩壊の道を手に取つ
た。

愛されなかつたというのは、生きなかつたのと同義である。そんな
二ーチュの言葉があるが、愛さなかつたことは、果たしてどうな
だろうか。

そういう意味では、多分、僕は生きていたのだらう。

ただ、愛さなかつただけで。

加賀峰凜。そのあけすけな笑顔は、僕を所詮行くことのできない光
の夢を見せる。

手を伸ばせばそれだけ遠くなり、手を伸ばさなければそれだけ近く
なる蜃氣楼のようなそれは、違いを見せつけながら僕を圧迫し続け
る。

感情を捨てた僕は、ひとつ余計なものまで捨ててしまった。
それは、自我。

自らを客観的に見つめ、社会集団の一員としてみなすこと。
それが多分、僕に圧倒的に足りない。

だから僕はこうも無関心で、凜はああもあけすけでいるから。
けれど、それがうらやましかった。

そんなことは、断じて、ない。

ただ、僕は知りたいだけなのかもしれない。

自分にすら無関心であつた自分の死に際して、何を抱くかというのを。

凛を、自らの肉体を失うことで、僕が凛にどんな思いを抱いていたのかということを。

もし僕が、僕でも凛でも廻でもない、ただの傍観者であつたら、僕をこう評すだろう。

『死に際して自らを知ろうとする欠陥人間』と。

けれど、僕が今抱いているものは何なのだろうか。

死にたいわけじゃない。

生きたいわけでもないけれど。

どちらでもいいし、どちらでも大して変わらない。

生きるきつかけがあれば生きるし、死ぬきつかけがあれば死ぬだけだ。

ただ何かが来るのを待つてから、そこへふらふらと歩み寄っていくだけだ。

拠所を捜し求める、夢遊病者のようだ。

何もない。ただ自分に降りかかるうとすることのみを受け入れる。自分の存在の醜さを見せ付けられてしまつた、あの日。

抗いはしない。

そんな行為、當にやめた。

それさえもめんどくさい。

無関心ゆえの無感動。ただ死ぬきつかけがなかつたから、自殺するなんてめんどくさいし、かつこ悪い気がしたから死ななかつただけの話。

死に直面し、自らを知ろうとする欠陥人間。

要は、抜け殻なんだ。

なんだ、そんなの欠陥どころじゃない。

……失格だ。

そう、人間失格。

僕はそれを深層心理の中で理解していたから、今こうしているのだろうつか？

失格者は生きないほうがいい。

生きるだけで迷惑だから。

結局は、やはり戯言なのだ。

「さて、暇はつぶれだし帰るよ」

僕は凛にそう言つた。

「そう？ じゃあ気をつけてねー」

案外あつさりと彼女は引いた。

僕は部屋を出るとき、凛に向かつていつた。

「そうだ、凛はいい子だよね」

「見た目からして百パーセント、善人でしょー」

彼女はそう囁く。

「いい子は、夜に出来ないちゃだめだよ」

「あう」

硬直する凛。

「どうしたの？ 急に……さあ？」

明らかに動搖が見える凛。

「いや、別に。なんでもないんだけどね」

「変なみー」

明らかに安堵がうかがえる凛。

「とにかく、今日も来るの？」

「あうう、なんのことさあ」

なんか可哀想になつてきた。

「ごめん、ほんとになんでもない、戯言」

「うー」

じゃあ、と僕は凛に別れを告げた。凛は答えないかな、と思ついたら

「じゃねーつ」

と打つて変わって元気になつた。山の天気もここまで露骨には変わ

るまい。

僕は凛の部屋を出る。

「…………」

でも、ここにきたことだって、全くの無駄じゃなかつたよつだ。
ひとつ、大事なことを思い出せたから。
とにかく、僕は凛のマンションを後にした。

外はすでに暗くなっていた。

僕は窓から外の様子をうかがう。

「…………やつぱりいるか」

電柱の影、加賀峰凛はそこにいた。

仕方ない。やつぱり凛は純粋だけどいい子ではないよつだ。

僕は首を振つて、外へ出た。

影がさつと動く。僕は無視し、できるだけ悠々と下へ降りる。

「ふう」

生暖かい風が皮膚にまとわりつく。日本の夏特有の高温多湿な夏は、夜にもその爪あとを残していく。

その最要因たるアスファルトを足蹴にしつつ、僕は何も考えずに歩き出した。

今日はすいぶん歩く。

私はみーちゃんの背中を追いかけながらふと思つた。

そう、今日のみーちゃんはなんかおかしかつた。

まるでこれから死地へ赴く入隊したての兵隊のような、そんな拳動不審。

昨日が特別なのか、今日が特別なのか。いや、そんなことほんびつで

もいい。

私が恐れていることは、彼が殺されてしまつこと。
考へるだけで、気が狂いそうになる。

ただ、彼の存在だけをよりどころにしていた私にとって。
彼の死は、私の精神死ともつながるのかも知れない。

私がそこにいたところでどうなる、なんて考へてもいなかつた。

……
ずいぶん歩いた気がして、ふと意識を招来すると、僕は土手に立つ
ている自分を発見し
た。

「疲れた」

言いつつ、ちらりと後ろを伺う。凛らしき人影が目に入る。

僕は、不意に走り出した。

なぜこゝにいるのか、自分でもわからない。理性では到底感知し得ない要因。

後ろから足音がしたが、やがてそれは遠いものとなつた。
僕は走るのをやめ、後ろを伺つた。そこに凛はいない。

「ああ、そうか」

僕は一人、つぶやいた。

走り出した理由。それは、凛だけは巻き込んではいけないという深層心理。

そして、こゝは。

「……」

あの橋だった。

僕は橋の下へと歩みを進めた。

生い茂つた草を踏みつつ、光とはまったく無縁、橋の下へとやつて

きた。

「なんで、ここにいるの？」

しばらくして、後ろから声が聞こえた。続いて、カラーン、と。

僕は答えなかつた。

「あなたも困つたものね。そんなに殺してほしいの？」

僕は口を開いた。

「さあ、わからないよ。気がついたら、ここにいた、それだけだ。死にたい、なんて思ったことないわけじゃないけど、そう多くはない

「生きたいとは？」

僕は首を振つた。

「死ぬのも億劫だし、自殺なんてかつて悪いしね

だから、今僕は最高にかつて悪いのさ、と自虐氣味に言つた。

「女の子は、悲しむでしょうに

ああ。

「確かに、そうかもしない。悲しんでくれるかもね。でもまあ、うん。ただなんとなく。いや、ただ、自分が死ぬときにどんな気持ちを抱くのか、それは楽しみかもね」

「可哀想だわ」

「そうかい」

「あなたなんてどうでもいいの、欠陥人間さん。でもね、女の子はどうなるの？彼女にとつて、あなたは唯一の拠所、それなのに」

「知つているような口を

「知つてるわ」

つけてたもの、しばらく。そう彼女は言つた。

「そうかい」

「あら、ミッチーに限つた話じゃないのよ？今まで私が殺した人た

ちはみんなつけていたわ。殺さなかつた人たちも、だけどね。私は、我慢できないのね。何も目的がなくただ生きてる。死にたくないから、零か一の一択だから、とりあえず一、生を選ぶって言ついい加減な人がね。まつとうに生きたくても、生きられない人もいるのに」

彼女はそう言うと少し哀しそうな目で僕を見た。

「私は、その中の一人なの。生きたくても、まつとうに生きられなって、言つね。話したつけ？私の家は、それなりの名家だつたの。お金もあつたし、父も母も優しかつたし。それなのに。こんなあります……」

少し以外だった。

暗い過去。

触つてはいけない傷。

そんなものが凪にあつただなんて。

何かを求めて。

乗り越えようとして。

彼女は今、ここにいる。

乗り越えるのがいやだからここにいる、弱いもの。

「……それは僕だ」

凪に聞こえないようにつぶやいた。

「さて、お話はおしまい。そろそろ、約束を果たそうかしらね」

そういうつて、気がついたら凪はナイフを持っていた。

凪は、悪戯っぽく微笑んだ。もし場面が違つたなら、五人中四人は心を射抜かれそうな笑みだつた。ちなみに、その一人は僕である。

「最後に一言。あなたにとって、あの女の子、凪さんは何だったのかしら？」

「ハツ……」

僕にとって、凪とは、だと？

畜生。

なぜ、それを今まで一度も考えようとしたかった？

凪にとっての僕は。

僕にとつて、加賀峰凜とは。

何なんだ？

幼馴染。いや。

「あら、考えたことなかつたんだ？ふふ、残念。もつと、早く気づいてたらよかつたのにね」

その声は、風に消えた。

ふつと。僕はよけた。

「なんによけるの？あなたは死にたいんじゃないって？」

友達。違う。

「あら、もしかして死に直面して、やつと生きたいって思った？」

親友。ふざけるな。

「もう少し、早く気づけるとよかつたわね。でも、まあ遅いね」

彼女。彼女？いや、違うだろ？

凧が疾走する。風よりも早いんじやないかと思つ速さに、僕は対抗する術を持たない。

気がつくと、僕は凧に組み伏せられていた。

ナイフが、高々と掲げられる。

「じゃあ、ね」

加賀峰凜。

いつも隣にいて。

いつも隣にいてくれた。

いつも隣にいて、無邪氣で、嫉妬するくらい無防備な笑顔を咲かせていた。

それは心を、

蝕み。

壊して。

和ませて。

生きる意味。存在の証明。

……そうだ。

「ああ、そうか」

「みーちゃんーー！」

刹那。

甲高い声が、静寂の空間を切り裂いた。

ふと、そちらに目をやる。

髪の長い少女。

小柄で、子供みたいな十九歳。

加賀峰 凜。

「……なんで」

僕の唯一の願いさえも、神は聞き入れてくれなかつたのだろうか。しかし、当の凛は、こちらを見ていた。暗いのに、よく僕の顔が見えることだ。いや、彼女の目には、僕しか目に入つていない。

凪なんて、網膜に映つてすらいだらう。

「ああ、よかつた……」

そんなことを言つた。

暗い中。

暗いところが苦手だと言つていた彼女。

心因的な恐怖は、時に自らを崩壊させるほどにも強力であるらし。

こんな暗いところに。

すぐむ足に鞭打つて。

高鳴る心臓を押さえつけて。

ただ、僕のためだけに。

と。

僕の上の少女は、さつと凛のほうを向いた。

高々と掲げられていたナイフが、凛のほうへと向いた。

そう、彼女は 凪は、殺人鬼だったのだ。

「……やめ……」

乾いた脣。下はもつれ、うまく言葉を紡がない。

畜生、こんな時に。

凪が、殺人鬼が、ナイフを構え、何も知らずに安堵している凛へ突進する

「止める！」

凜の首筋の寸前、凪の腕がぴたりと止まつた。凜は何が起こっているのかよくわからないような目で、ぼうっと僕のほうを見ている。自分があと少しで殺されるなんて、考えてもいいだろ？

「そいつのことが、好きなんだ」

僕は知らず、そんな言葉を言つていた。

これが答えた。

僕にとつての凜。

凜にとつての僕。

それは、

幼馴染じやない。

友達じやない。

親友でもない。

恋人でもない。

ただ、

かけがえの、ない存在なのだから。

「……だから、殺すな」

殺す、という言葉に反応して、凜がようやく事態を察知したようだ。うにつ！と悲鳴を上げるが、そこから動こうとはしなかつた。と、凪の肩がふるふると震え始めた。

怒っている？ いや、違う。

「ふふ……あははははは……」

笑つていた。さもおかしそうに、体をくねらせ……はしなかつた。

「はは……あー、面白い。殺そうと思つたけど、止めた。白けた。とんだ茶番ね。全く。でもまあ、あなたみたいな人からそんな言葉が聞けただけでも十分ね」

そんなことを言つと、今度は彼女は凜のほうへ向き直つた。

「ごめんね、彼氏さんに。でも、いい物を見させてもらつたわ。いいことも教わつたしね。

……凜さん、だけ

いい人ね。うらやましい。

そんなことを凧は言う。ナイフを鞘に収めると、ビルに行くでもなく歩き出した。

「……ああ、みーちゃん

硬直していた凧の意識が戻つてきた。

ぱたぱたとこちらへ近寄つてくる。

僕はいまだ地面に伏したままだったので、腕を支えに起き上がる。

「みーちゃん、ほら、手」

凧は、手を差し伸べてきた。

小さな手。

細い、華奢な手。

僕は、無言でその手をとった。

よいしょ、と立つ。

「さて、と

「帰ろうか」

そうだね、と僕は言った。

それ以上、言葉は何も要らない。

どちらからともなく、二人は手を絡ませていた。

カラン、カラン、カラン、と。

下駄の音は、いつまでも夜の街に響いていた。

僕は街にいた。

待たされるのには慣れている僕には、一時間くらいの遅刻は無に等しい。

あれから、どのくらい経つたろうか。少なくとも、一週間は経つた。……この街を賑やかしていた連続通り魔は、十一という数から先へ行くことはなかった。嘘のように、ぱつたりと姿を消してしまったのだ。

でも、それのほうがいいのかもしれない。

何かを求めていた彼女。

それを見つけられたのなら。

ふと遠くへ目をやると、白いワンピースを着た加賀峰凜が目に入った。今日は珍しく、黒いコートは着ていなかった。

僕の姿を見つけると、うれしそうに手をふる。

僕もとりあえず手をふり返す。

けど、その心には虚無しかなかったわけではない。きちんと、不安だとか、焦燥だとか、そして希望だとかも収まっていた。

でもまあ、今日は最後者のしめる割合が多いかもしれない。

第一回加賀峰凜アンド僕の買い物フェスタ。

僕はそちらのほうへ歩んでいく。

ふと、横を見る。

そして人ごみの中に、僕はきれいな顔をした和風の少女を見出した。偶然、運命、奇跡。そんなのを信仰する僕ではないけれど、とりあえず今回は信じてやつてもいい気分になつた。

彼女は、もう一人ではないようだ。柔軟な顔立ちをした少年と一緒にいた。

これも何かの縁だ。僕は目礼をし、彼女はにこりと笑う。

そして、僕は視線を戻す。

手をふり続ける、加賀峰凜へと。

太陽は燦燦と輝いて。

風はそよそよ吹いていて。

気候は温暖、天気は晴天。

僕と凜は、どこぞへ向かって歩き出した。

その手を、固く、結んだままで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8739e/>

光と闇のハザマ～Faulty Person～

2010年10月9日04時19分発行